

釣れ釣れなるままに

2011年思い出の釣行記 PART. 6

有り難うございませ〜す 鹿島釣狂



9月23日の釣果

高所恐怖症？

☆釣行日 平成23年9月23日
☆入釣場所 箸別川河口
☆釣果 牡シヤケ 74cm 1 ソイ30cm 1

女房が結婚35周年を迎えるので記念に旅行でもしましょうかという。35という数字

にどれだけの意味があるのか分からないが、退職した今、二人での旅行もいいかなと思う。新婚旅行で海外に行ったきりで、それ以来、小旅行はともかくどこにも連れて行ったことはない。嘱託といえども勤務している身分ではそんなに長く休暇は取れないので3泊4日の計画で沖縄に行くことにした。

私は飛行機に乗ると胸がドキドキして、ハアハアと息遣いも荒くなる。別に高所恐怖症というのではない。それは空からの景色を楽しめるからだ。座席の窓際を分捕って窓にへばり付くように眼下を眺める。海と陸とが入り組んだ三陸の海岸線などは飽きることがない。雲の隙間から見える山々の尾根やそれに連なる谷川の流れ、谷間に寄り添うように建つ民家、広がる田畑を眺めていると、そこに住む人々の生活までもが垣間見えるような気がするのだ。

3月にも旅行を計画したのだが、あの東日本を襲った震災でゴ和算になった。今回は台風が接近しているという。楽しみにしていた空の上からの眺めだが、ほとんど見る事が出来ない。しかも、私の座席の窓下はあいにくの翼になっていた。それでも雲の隙間から見える景色には堪能させられた。

沖縄では15号台風が停滞していたのだが、幸いにも天気は崩れることがなく多少風は強いが晴れ間も覗いていた。スキューバダイビングやシュノーケリングで珊瑚の海を覗いてみたいという計画はだめになったが、チュラ海水族館でその雰囲気味わうことが出来た。特にロウニンアジの群れが圧巻で、釣り心を擽られた。

北海道に帰ってみるとあれほど沖縄付近に停滞していた15号台風が勢力を強めながら一気に追いかけるように付いてきて、紀伊半島を中心に甚大な被害をもたらした。

ヒートアップ

15号台風が足早に駆け抜けた9月23日、日本海側が穏やかになったので増毛海岸にシャケ釣りに行くことにした。まだ暗い内に着いたが、箸別川河口の流れ出しから順にルアーマンが並んでその右端にブッコミで竿を出している人がいた。少し躊躇したがルアーマンとブッコミの間にゆとりがあったのでその両隣に挨拶してから荷を下ろす。さらに私のすぐ後から来た2名がブッコミとの間に並んだ。その方は、昨日の午後ここで4本上げたと言うが、ブッコミに迷惑がかかるかかからないかのぎりぎりの線だ。

またまた更に後から来たルアーマンがその間に割り込もうとしたので、先に並んだ二人との間で言い争いになった。二人は「自分たちは、先に入ってここで夜明けを待っている。隣にブッコミが入っているのでこのスペースではもう無理だろう」というのだ。後から来た釣り人は「海は誰のものでもない。あなた方が先に来たのかもしれないがここで竿を出していないのだからどこでやろうが自分の勝手だろう。それにまだまだスペースがある。」と譲らない。

嫌なことになった。巻き添えを食わないようにと知らぬ半兵衛を決め込んでいると、争いが更にヒートアップしてきた。先に入った二人は「先に来ていた私達に挨拶があるなら

まだしも黙って強引に割り込もうとする了見が気に入らない。あんたがいると気持ちよく釣りが出来ないのどこかに行ってくれ」という。お互いに言い分はかみ合わない。

仕方なく「どうしたんだい」と仲裁する羽目になる。お互いの言い分を聞いてから後から入った釣り人に「そんな気分のまま隣同士で釣りをする気持ちが分からない。ここは後から来た者が折れるべきだろう。ところであんた、隣のブッコミの人には挨拶をしたのかい」と言ったところで、悪態をつきながらもようやく引き上げていった。しかしというべきか案の定というべきか、その場所を確保した二人もブッコミの方にルアーが流れていっては誤る羽目になった。私としてもこの二人のお陰で、ぶっ込みに気兼ねなく竿を振ることが出来たのだ。

潮は河口から私の正面を流れて右の方に流れている。私はなるべく左に投げて正面に来たところでルアーを引き上げるようにしていた。隣同士で間合いを計りながらルアーを飛ばすことが大事なのだ。たとえラインがかぶったとしてもお互いに声を掛けながら竿を操作するだけで一度もオマツリすることはなかった。

ルアーを投げ込んで引き始めるとコツコツとアタリが出てすぐにギューンと竿先を引き込んだ。1年ぶりとなるシャケの感触である。ギンピカのオスでメジャーを当てると74cmを指していた。周辺でもポツポツと釣れ出した。特に青いルアーに食いつきがよさそうなので青いルアーに変えてみたが、その後は一度もアタリが出なかった。

私の左隣は留萌から来たという若いルアーマンでマナーもよくシャケ釣りのことをいろいろと教えてくださった。彼には1本もかからなかったのだが、勤務があるとかで愚痴を言うわけでもなく爽やかに引き上げていった。私もこの1本で満足して長居は無用と早い内に引き上げた。

岩見沢釣遊会第5回大会

☆開催日	平成23年9月25日			
☆開催場所	東静内港～浦河港			
☆入釣場所	春立			
☆釣果	アカハラ	414	mm	4
	ハゴトコ	262	mm	1
	重量	280	0g	
☆成績	合計点数	956	点	
	成績	準優勝		

3. 11の大震災を筆頭に、これでもかというように今年は自然の脅威を見せつけられている。9月には台風12号、15号が日本列島を襲った。暴風雨が山肌を削り、多くの家や田畑が水に浸かった。そして、15号台風が足早に北海道を駆け抜けた頃、会長より電話が入った。第5回に予定していた黄金道路方面は、台風の名残のうねりが予想されるので、安全と6回大会の下見を兼ねて日高方面に変えるというのだ。会を預かる長として

適切な判断に頷く。

大会の準備をしていると重量計が壊れているのに気がついた。液晶画面が黒ずんで用を足さないのだ。デジタルはキッチリと数字を出してくれるので何かと便利だが、アナログのような修繕が利かない。購入してからの使用年数はそんなに経っていないのだが電子基盤がピッシリと組み込まれたものには手が出せないのだ。仕方なく今回は、以前使用していたものと同じアナログの台秤を購入した。

会長がアナゴ釣りの道中、ボソリと「釣狂は大会での釣り場を変えて色々試しているようだけれど、一つ所に決めて追求するのもいいのではないか。もうそんな年になってきていると思うよ。」と呟いた。頷くこと大いにあるが、一度も経験したことのない未知の釣り場に立つことがわくわく感を募らせる。そして自ら新たな釣り場を開拓したという自己満足感もあるのだ。

今回の大会範囲では、春立周辺に入って優勝することが多かった。元静内橋下の舟揚場から春立駅裏までの区間を何度も釣り歩いた。おぼろげながらもカジカやアブラコにつき場が分かってきたところである。アブラコの自己最身長となる53.2cmを釣り上げたのも春立入り口で12月31日の大晦日のことであった。また、春立4区はカジカを大釣りして自己記録となる1529点をたたき出した所でもある。土砂降りの大会では元静内橋の下に逃げ込んでその舟揚場で釣りをしたこともある。春立漁港では嫁となるアカハラは確実にいる。審査にはあまり関係ないが、春立駅裏でカンカイの入れ食いに遭遇したこともある。ここ最近ではタカノハが釣れ出したというので狙ってはいるのだが大物には恵まれていない。その時期によってはハゴトコだけの惨めな成績に終わることもあったのだが、今日はこの釣り場を熟知してみようと思う。会長が言うようにこの釣り場範囲ではこと決めて釣り場の隅々を探求するのもそれなりの価値はあるだろう。海は刻々と変わっており条件はいつも同じではないが、その釣り場内を徹底的に開発するのだ。

午後10時半には春立漁港に着いた。まずは嫁の確保というわけでアカハラ仕掛けをドボン、ドボンとやる。まもなくアタリが出て35cmほどのアカハラがあがり一安心する。そして45cmはありそうなブツイのも来た。若者2名が立ち寄り「こんなに大きなアカハラがいるのか。」と少し戸惑いながらも先に進んだところでサビキ釣りを始めた。2名の釣鱗会のご同輩がやって来た。昨年、仲間がこの港内で49cmのクロガシラを釣り上げたという。この時期でもじっくり粘ることによって優勝を狙うことが出来るというのだ。

午前1時、クロガシラにも多少未練はあるが、アカハラが4本そろったので春立4区の方へ移動することにした。向かう途中、ゴトンとキャスターの車輪が外れてしまった。昨年白里谷の釣行で外れた車輪を無理矢理車軸に突込んで使ってきたのだが全く用を足さない。重い荷物を担ぎ直して春立交番前までの道程を歩くことになった。時間の余裕があるので各舟揚場を何度も往復しては海況を確かめる。沖では白波が立っているが、舟揚場の向きや海底のつくりによって波が立つところとそうではないところがある。それに従ってゴミの寄り方も違うようだ。潮がまだ混んではいたが、舟揚場を下りて砂原の海岸か

らカジカやアブラコ仕掛けに加えて用意したタカノハ仕掛けも遠投してみた。しかし、アタリが全く出ない。ハゴトコも釣れない。

間抜け面

薄明かりが差してきたころ春立4区に移動した。今は亡き佐々木秀美氏が50cmアブラコをダブルで引き抜いた舟揚場で竿を設置する。ようやく一服付けたところで緊急放送が流れてきたが、音が割れて内容が良く聞き取れない。揺れは感じなかったがひよっとして地震・津波情報でも出たのだろうか。こんな年だからと背後の丘をにらみながら身構えていると、周辺に舟が集まってきて昆布取りの放送だったのだと分かる。私の目の前にも3艘の磯舟が昆布取りの合図を待って待機し始めた。竿を上げて様子を伺っていたが、かけ上がり近くまでやって来たので移動場所を物色する。

昆布取りの舟のいない左の方へと移動して全てチョイ投げして様子を見る。今度は昆布を満載にした舟がこちらに向かってやって来た。またまた竿を上げて様子を伺うことになった。干上がった岩盤上にキャタピラーの付いた昆布を運ぶ箱形の重機が移動してきている。そして次々とやってきた磯舟から下ろされた昆布を満杯にしてその重機が玉石原へと運んでいる。そこは昆布取りの磯舟の通り道になっているらしい。

そこから追い出されるように今度は右へと移動する。磯舟もいないが魚もいないらしい。性懲りもなく遠投を避けて、チョイ投げしているが、エンジン音で魚などいるはずもなくアタリは全く出なかった。



昆布取りの舟が引き上げた後に入った平盤。竿を設置している場所は昆布運びの重機が行き交っていたところだ。手前は舟揚場なのだが干潮時なので磯舟があがれないのだ。青草が茂っているので満潮時はカジカがノッコンでくる事が予想される。干上がった平盤にはウニやツブがへばりついていた。

二人のご婦人が、平盤で腰を曲げては何かを採集している。近寄って話しかけると台風で打ち上げられたウニとツブを採取しているとのことである。次の舟がやってくる少しの間間を見ては拾っているらしい。昆布取りのお手伝いに来た都会風のご婦人に地元風のご婦人がウニの居場所を教えている。私もそのご婦人達に習って干潟遊びで時間をつぶすことになった。芳醇な海の幸を得て、こんな時のためにと用意した酒が旨い。

とうとう締め切り時間がきてしまい道路に上がると、空中で旋回していたカラスが車道に黒いモノを落とした。車のタイヤにクルミなどの木の実を踏みつけさせてその中身をついばむ利口なカラスがいるという。それを車がひいた。なんだろうと近寄ってみるとウニである。しかし、中身は空っぽで、空を見上げた時にはもはやカラスはいなかった。中身を食ろうとしたのではなく、間抜け面をしていた私をからかうためにやったのではなかろうか。

審査結果

優勝	嵐 光博	1056点 (アカハラ443mm+アブラコ273mm+3400g)	東 静 内
準優勝	鹿島釣狂	956点 (アカハラ414mm+アブラコ262mm+2800g)	春 立
3位	前野達志	944点 (アカハラ365mm+カジカ 337mm+2420g)	梟 舞
身長優勝	吉井 博	970点 (カジカ 427mm+アブラコ337mm+2420g)	盈 進

大会優勝者の嵐氏が入った東静内漁港では8名がアカハラを狙って竿を出しており、獲物に恵まれない釣り人を横に入れながら、嵐氏自身はアカハラ44.3cmを護岸際でとったのである。潮が引いてからアサリ浜のテトラ周辺でカジカを狙ったが不発で嫁はハゴトコとなったが、卵を抱えて太ったアカハラが重量を稼いでくれたのだ。

身長優勝の吉井氏は、布辻川でアカハラを狙ったが皆無で、旧越海大階段周辺でも振るわず、最後の砦の盈進でハゴトコに悩まされながらも明け方にカジカ42.7cmを射止めたのだ。

「有り難う御座いま〜す」

☆釣行日 平成23年10月8日

☆入釣場所 箸別川河口

☆釣果 雄シャケ 70cm 1



猛者達の中で女性アングラが孤軍奮闘。また、彼女のルアーに掛かった。周囲の釣り人

もあきれられるばかり。女性には必ずといっていいほど周囲の男共は手助けをする。周辺に転がっていたシャケは、彼女が釣り上げたものだ。

釣具店でシャケ用のルアーを物色していると、同じようにルアーを捜していたお客が「アカハラも良いエサになる。先日のシャケ釣りでは、アカハラをエサにしていた隣の人に完敗してしまった。」と呟いた。そこで、本日は釣り大会のために用意したアカハラを冷凍庫から出して持って行くことにした。

到着が早かったため前回よりも少し河口寄りに座り込んで明け方を待った。4時、まだ辺りは暗かったがウキにギョギョライトを付けてフカセ釣りで始めた。まもなく河口近くにいた釣り人がシャケを上げたのを切っ掛けにして、皆がウキルアーを飛ばし始めた。ギョギョライトが放物線を描いて暗闇の海に向かって飛んでいく。私もすぐにウキルアーに変更する。

その光に幻惑されたのか左隣に入った若い夫婦がギョギョライトも付けずに打ち始めた。どこにウキが飛んでいるのか見当も付かない。打った当人は分かっているのだろうが周辺の釣り人はウキがどこにあるのか分からないので結局オマツリしてしまう。私は打つのを諦めて隣のウキが見えるようになるまで待つ事にした。

その夫婦の夫の方が掛けた。3年魚の小さな魚体でしかもかなりのブナが入っている。奥さんが大事に抱えて用意した大きなクーラーボックスに仕舞い込んだ。オマツリすることが嫌でルアーを飛ばすのを我慢しているのに、遠慮のない隣にあまりいい気分ではなかったのだが、その夫婦のはしゃぎっぷりは私のその気持ちを吹っ飛ばしてしまうようなものだった。

隣人のウキも見えるようになってきたので、今日用意したアカハラをエサに付けてみる。皮も身も柔らかく、良い具合である。そしてまもなく、ルアーが着水した直後にアタリが出て待望のヒットである。銀ピカのシャケが上がった。前回釣り上げたシャケは、石原に放置したままだったので、自宅に持ち帰って処理したときには活きがかかなり下がっていた。それに懲っていたので、隣人と同じように今回用意したクーラーにシャケを仕舞いこんだ。

甲高い声で「有り難う御座いまーす」という女性アングラーの声が響いてくる。河口近くで並み居る男共を従えてルアーを飛ばしているご婦人がいたのだ。彼女にシャケが掛かった。周りの男共が竿を上げて声援を送っている。そして。波打ち際で暴れるシャケを蹴飛ばしては彼女の元へと運んでいる。それが何度か繰り返されて「有り難う御座いまーす」の甲高い声が絶好調になってきた。様子を見に行くと4本のシャケが彼女の周りに転がっていた。彼女のルアーは男性陣に勝とも劣らない飛距離で、川の流れ出しの先端に届いている。ルアーは裏表とも黒点入りの朱色で肉厚だ。男性陣の手を借りなくても見事な取り込みである。そして、彼女ばかりに掛かり続けると、男性陣は何故この女性にばかり釣れて、自分には来ないのだろうとお互いの顔を見合わせる仕草になってきた。どよめきと嫉妬、羨望、己への卑下。そんなことが繰り返されて、私がある場を発つときには、女性ア

ングラーの周りに、結局8本の銀ピカのシャケが転がっていた。



10月8日の釣果